

緒方洪庵と種痘

——その人脈を探る——

古西 義磨

除痘館記念資料室専門委員

幕末の蘭方医・緒方洪庵は医学や教育など多方面で活躍した。その一つが感染症予防で、当時毎年のように流行していた天然痘（痘瘡，疱瘡）の予防のための種痘であった。

昨今の新型インフルエンザを例に出すまでも無く、感染症は古くから、あるいは新たに流行したが、幕末の感染症の代表は天然痘であり、新型の感染症としてコレラが新たに流行するようになった。コレラに関しても洪庵はその治療に苦心し、『虎狼痢治準』の出版など行い、ある程度初期であれば完治出来るとの手紙を書いている。

しかし、天然痘に関しては事実上医療を施しようが無いなかで、オランダ文献の翻訳を通して早くから牛痘種痘のワクチンが存在することを学んでいた。

嘉永2年（1849）、福井藩の笠原良策が牛痘ワクチンを入手したと聞いたとき、洪庵が用意したものはまず大坂における種痘所と、各地に広げるための分苗所であった。当時の除痘館の引き札をみると、前半は種痘の効能を記し、後半は大坂以外でも種痘が出来ますと、各地の分苗所を記した。しかし、当所は地名のみで、3枚の引き札において、半年掛けて具体的な分苗所を増やしていった。

洪庵らが主宰した大坂の除痘館は嘉永2年（1849）から明治初年までに関西を中心としながらも西は九州の壱岐・対馬から関東までの189所に分苗を行っている。それらの分苗がどのような人脈で行われたのか、探ってみようと言うのが今回のテーマである。

洪庵の考えた方を知るのに参考となるものは、例えば手紙であったり、日記がまず考えられる。日記に関しては既に緒方富雄著『緒方洪庵伝』（岩波書店、1963年）に翻刻されており、また手紙についても『緒方洪庵のてがみ 全5巻』（業根出版、1981～96年）が出版されている。今回の発表においてはこの緒方富雄、梅溪昇編『緒方洪庵のてがみ 全5巻』を中心に洪庵の人脈を探ってみたい。

緒方洪庵筆の手紙は、宛て先が60人、手紙の数は250通を数える。その年代は足守の両親宛のものもあって天保11年（1840）から亡くなる直前の文久3年（1863）6月間であるが、

その大部分は安政年間～文久年間の約10年間（1854～63）に絞られる。従って、大坂の除痘館活動が安定期に向かう頃であり、設立直後のワクチン接種の効用を説き廻ることが少しずつ不要になって来た時期かと言えよう。

そこで、これらの260通の手紙を読んで見ると、大坂の除痘館の運営のこととか、お玉が池の種痘所のこととかは当然出てくるが、残念ながら189カ所の分苗所とのやりとりなどは発見出来なかった。ただ、長崎に留学している門人などを通じて英語の辞書や不足している外科書を探求していることから、手紙としては残っていないが、除痘館が軌道に乗るまでには牛痘種痘似ついで門人とのやり取りが手紙などを通じて行われたことと考えられる。

私は拙著『緒方洪庵と大坂の除痘館』（東方出版、2002年）に於いて、適塾門人やその一族の中で分苗を受けた人々を調査しその後追加で調べた結果、20数カ所を数えた。大坂の除痘館は緒方洪庵一人の種痘所ではないが、その中心人物として活躍しただけに、洪庵にかかわりのある人々は、これら以外にも多く見られることと思われ、今後も洪庵の人脈を紐解いていきたい。